

救護第28班 5月23日～5月31日 研修医・岩下 孝粋



地元の医療機関がかなり立ち上がっていて、救護医療は過剰の状態でした。牡鹿半島など熊本が受け持った20カ所以上の避難所を最終確認として見て回りました。瓦礫はまだ残っていましたが道路はほぼ通れる状態でした。避難所のライフラインはある程度復旧していましたが、まだ水がきていないところもありました。満潮になると冠水する地区もありました。



避難所の確認は3日で終わり、被害の大きかった女川地区などの視察もしました。また一般のボランティアに混じって瓦礫の撤去作業や交通整理の手伝いなどもしました。ボランティアの人たちは大学の構内などにテントを張って救援活動をしていて、男性が多かったんですが、1人で来た女性もいました。看護師さんだったと思います。

いろんな人に話を聞きましたが、斜面の小屋に住んでいた80代の老夫婦が今も心に残っています。津波で母屋が流され少し高いところにあった小屋が残り住んでいるけれど、将来また家を建てて、ここで暮らしたい、とおっしゃってました。その津波に負けない、へこたれない生命力みたいなものを、牡鹿半島の人たちに接して、感じました。

半島の人たちは救護に頼らず自分たちで、再開した病院に通院していました。むしろ都市部の人たちのほうが、頼りたい気持ちが強いように感じました。